

春夜

宋·蘇軾

中国名詩選（下） 三三二頁

春宵一刻值千金
花有清香月有陰
歌管樓臺聲細細
鞦韆院落夜沈沈

飲湖上初晴後雨

二首其二 宋·蘇軾 中国名詩選（下） 二九一頁

水光瀲灩晴方好
山色空濛雨亦奇
欲把西湖比西子
淡粧濃抹總相宜

贈劉景文

宋·蘇軾 漢詩鑑賞事典六三一頁

荷盡已無擎雨蓋
菊殘猶有傲霜枝
一年好景君須記
最是橙黃橘綠時

澄邁驛通潮閣

二首其二 宋·蘇軾 中国名詩選（下） 三三〇頁

餘生欲老海南村
帝遣巫陽招我魂
杳杳天低鵲沒處
青山一髮是中原

飲湖上初晴後雨二首

其一

朝曦迎客艷重岡

朝曦は客を迎えて 重岡艷ちようこうかがやき

晚雨留人入醉郷

晩雨は人を留めて 酔郷に入らしむ

此意自佳君不会

此の意自ら佳なるに君会せずや

一杯當属水仙王

一杯当に水仙王すすに属むべし

【語釈】 醉郷：酔い心地。水仙王…宋代西湖旁有水仙王廟，祀錢塘

龍君，故稱錢塘龍君為水仙王。

其二

水光瀲灩晴方好

水光 瀲灩れんえんとして 晴れて方に好し

山色空濛雨亦奇

山色 空濛として 雨も亦奇なり

欲把西湖比西子

西湖を把って西子に比せんと欲すれば

淡粧濃抹總相宜

淡粧 濃抹 総べて相い宜し

【語釈】 瀲灩…水が揺れて光りきらめくさま。空濛…定かに見えぬさ

ま。西子…西施、呉に敗れた越王 句踐は美女の西施を、呉王 夫差に 贈って惑溺させ、呉を滅ぼした。濃抹…おしろいを濃く塗る。

芭蕉（奥の細道）…象瀉きさかたや雨に西施がねぶの花

贈劉景文

劉景文りゅうけいぶんに贈る

漢詩鑑賞事典六三一頁

荷盡已無擎雨蓋

荷はすは尽つきて 已すでに雨あめに擎ささぐるの蓋かさ無く

菊殘猶有傲霜枝

菊きくは残おとろえて 猶なお霜しもに傲おじるの枝えだ有り

一年好景君須記

一年いちねんの好景こうけい 君きみ須すく記きすべし

最是橙黃橘綠時

最もも是れ 橙とうは黄わうに 橘きつは緑りよくなる時とき

名は季係きせん。景文は字。タングート族の西夏と戦った將軍劉平の子で、この時、杭州で民兵の部隊を率いていた。蘇軾は、その人物を高く評価し、中央へ推薦してもいる。

橙：ユズ。橘：ミカンの類。「橙黃橘緑」は、晩秋から初冬の候。

【通釈】はすの葉は枯れ尽きて、もう雨に向かってさしひろげた傘のすがたはない。菊の花は咲きおとろえて、見る影もなくなつたが、それでも霜の寒さにめげぬ一枝はある。一年のうちのよいながめを、あなたはぜひと覚えておいてほしい。何よりも、ゆずの実は黄色く、みかんはまだ緑色の、この時を。

元裕五（二〇九〇）年、五十五歳の作。蘇軾は元豊八（一〇八五）年に都へ召還されてより、弟の蘇轍とともに重用され、天子の秘書である翰林学士などを歴任した。しかし旧法党の政治は、時代に逆行するする面が多く、いたずらに混乱をまねいた。…中略…そのいとわしきから、元祐四（一〇八九）年、外任を求めて、杭州（浙江省杭州市）の知事となつた。劉景文とは、この時始めて知り合つた。

【補説】この詩に寓意を読み取る解釈もある。起承の二句は、劉景文の兄弟が皆早逝し、景文一人が生存していることを言い、転結の二句は、景文も年老いてきたが（この時五十八歳）、今こそ奮起して立派な勲功を立てるべきである、という励ましの意を含むという。

澄邁驛通潮閣

其一

倦客愁聞歸路遙

倦客 愁えて聞く 歸路の遙かなるを

眼明飛閣俯長橋

眼は明らかに 飛閣より長橋を俯す

貪看白鷺橫秋浦

貪りて看る 白鷺の秋浦に横たわるを

不覺青林沒晚潮

覺えず 青林 晩潮に没するを

【通釈】旅につかれた旅人は歸路の遠いのを愁え、高楼から長い橋を見つめる。

白鷺が秋の入り江に身を休めるのを飽かず眺め、密林に夕潮が浸すのに
も気づかないほど。

其二

餘生欲老海南村

余生 海南村に老いと欲す

帝遣巫陽招我魂

帝は巫陽をして我が魂を招かしむ

杳杳天低鶻沒處

杳杳として天低く 鶻の没する処

青山一髮是中原

青山一髮 是れ中原

【語釈】澄邁驛…海南島の北の宿場、通潮閣はその地の樓閣。鶻…はやぶさ。中

原…長安、洛陽等の中国の中心地。承句…屈原の「楚辞」招魂を借りて
徽宗が蘇軾を召還した事をいう。

【通釈】残りの人生を海南島の村で老いてゆくつもりでいたが、帝は巫陽に私の
魂を招き戻させてくれた。暗い空が低く垂れ、ハヤブサが消え去るあた
りに青山が毛筋ほど細く見える、あれが中国だ。